

# 道徳教育において 多様性をいかに扱うか



## 多様性は大事だけれど

多様性 (diversity) に対する学校教育の取り組みとして、インクルーシブ教育や、多文化共生教育、性の多様性を意識した実践などが展開されています。ここでは、これら多様性に関わる問題の根底にある「私たちはそもそも、無意識のうちに先入観をもって、他者を見てしまっているのではないか？」というところに切り込んでみたいと思います。

## 「無意識のバイアス」

道徳心理学者のグリーンは『モラル・トライブズ』<sup>※1</sup>において、数万年にわたる長い歴史の中で、人間は集団内において協力するように進化したことを述べています。私たちは同質なものから成り立つ集団を形成し、そこで他者への思いやりや平等性という考え方を獲得してきました。そのほうが種の保存にとって有益だったからです。しかし、このことは、同質なもので集まっているはずの集団の中に異質なもの（外見的なものから、考え方や振る舞いなどまで）が入ってきた際には、それを排除するという特徴もあることを意味します。こうした特徴は、私たちの思考にも影響を与えるでしょう。「無意

識のバイアス」とよばれるものがそれです。

「無意識のバイアス」とは、私たちが知らず知らずのうちに抱いてしまっている先入観や偏見を意味します。私たちは相手の身なりや出自を見ただけで、直感的に判断や評価を下してしまっています。そしてそれは直感的＝無意識であるところが非常に厄介なところです<sup>※2</sup>。

自分が特権階級（マジョリティ）にいるときには、さらに厄介です。男性が優位な社会で生活を送っている男性は、その社会において特権階級です。「日本人」が多い教室では「日本人」が特権階級です。そして、自分が特権階級にいるという自覚がないと、マイノリティに対する無意識の先入観や偏見にますます気づかなくなるのです<sup>※3</sup>。

## 道徳の授業で何ができる？

まずは、人間尊重の精神、基本的人権を尊重するという価値について、子どもたちに伝えていく必要があります。日本国憲法、世界人権宣言などで主張されていることです。「私たちは一人一人が大切な存在である」ということは、学校生活のあらゆる場面で伝えていく必要があるでしょう。これは、教室そのものが人

間尊重や共感に満ちた安心・安全な場であることにもつながります。

そのうえで、さらに必要になってくるのが、子どもたちが自分の「無意識のバイアス」に気づいていくことです。そのためには、そもそもを問い直していくクリティカルな働きかけが必要になってきますし、多様な人々との交流も大切です。世の中の問題発言などを取り上げて、「誰のことを配慮していない発言か？」ということを考えてもよいでしょう。

多様性を大切にするためには、自分自身が多様性を否定する考えをもっているかもしれないということに気づく必要があります。主義・主張が固定的になる前の義務教育段階だからこそ、多様であることの重要性に気づかせていきたいですね。



荒木寿友 ●あらかすとも

立命館大学大学院教授(教育学、道徳教育)。主な著書に、『いちばんわかりやすい道徳の授業づくり』『ゼロから学べる道徳科授業づくり』(ともに明治図書出版)などがある。

※1 『モラル・トライブズ 共存の道徳哲学へ(上・下)』(ジョシュア・グリーン 著、竹田 円 訳/岩波書店)

※2 『無意識のバイアス 人はなぜ人種差別をするのか』(ジェニファー・エバーハート 著、山岡希美 訳/明石書店)

※3 『真のダイバーシティをめざして 特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』(ダイアン・J・グッドマン 著、出口真紀子 監訳、田辺希久子 訳/上智大学出版)